



十波羅密



5  
1807







擬 杏東



一条菊下此有君之将多物系  
 九花中时香又出之女房此  
 乃下台里之菓之里海招之  
 名以出此物之味也  
 其孔大  
 七花之  
 古家之兄也  
 峰谷柿



其二 観人

取寄此の書に魯の史記あり  
了て昌平の史記あり三子此  
諸生入るるの門より書きたり

申之れはたかき書きたり

水九月

其三 野坡

信寄此の書に魯の史記あり

可き事れつれをそしめおぼるるは  
はるるを自らしりて回集する  
書及れをそしめ

取寄此の書に

了て昌平の史記あり

其の四 惟新

此の書に魯の史記あり  
茶飯の元書に記あり



冬こそ里人

物いふもなほの純

其の五 支考

引乃山北配の昔昔此と傳し  
合ふの三御詣時をうづへる  
俗此石と云ふり 葉酒を此み  
かし速く傳ふと云ふし  
故に声也 奴直に傳ふ  
九硯

其六 詩六

熊治屋此お噂乃之爲言り  
山灰鉄や此くお水もこの大  
お水 (果 讀むおまの言  
予のひるおし 言ふも夫より  
おしちちを 棚りあは

草是傳や

人分る此 底をぬく



其七 香角

香角のふもをばらけむくま揃り  
けりてし此處の跡は夜着を  
かふ所

かゝるに かくるに 冬牡丹

花はさむりの花はつらうが水争  
急ぎつらう跡は急流は神をい

初朝や先ひ水のあゝ  
かゝるに

其八 山嵐

山嵐の跡はかゝるに昔は  
字す所柳枝家あり昔れに  
祖母吾女世のあまし時つら  
昔よりゆきをかきし跡は一  
杯一酌りひさしくゆへに廊は  
大なるかゝるにのこりたる  
きよは八十年此の今子孫



三代そのの...  
へま園縁なる

此人や画...  
さした本蓮也

其九 犬学

ふれゆく...  
のれ人...  
をの...  
園...

佛を火...  
大福智識...  
い...  
水...  
神...

其十 曲水

春東...  
銘尚...



景許六の垂指傳惟然風器  
命仙是舊唐の言身已くり  
風流格おにこ志のこわれ一博  
ここの通れ其をわくそれ急を  
白く

はみ分ていといふ  
そやほ其舞か

右十躰  
宇重厚本

歌仙

十此指かぬえをや月此友 重厚  
二初之秋すまき 彩のぬれ危 其由  
かな手本子編一解に替やのそ 成美  
ふ向を 鼓此筒をこころをに 表下  
こしかき此指をつふ冬の境 寸来  
あり本まらぬ抽子此風器ら 一成



紺乃此きまの休をうつて  
内野新地此暗地志つた  
道此をいひまの國此捨等  
乃此以餅此極まるとい  
何此其詞此言其風俗  
立此而此舞此かたのつ  
はまがる箱此扇り小魚い  
有る此あまの流志あまの

麥言 宗讚 由 厚 丁 義 成 来

道此此乃の獨此其靴  
酒考る家此門此  
之此此此此此此此  
傳此此此此此此此  
嬰此此此此此此此  
毒此此此此此此此  
夕此此此此此此此  
穴此此此此此此此

讚 守 厚 由 義 丁 来 成



二三本益此女に竹を抄きし  
余もさうけえ古此名をさふ  
春坊此画が手に似る咽れ髪  
嵐此の髪に灯小くさふ  
面管此のさかてる麻斗此切  
泣くさあおれせし傍輩  
月をさく一夜をさる官此福  
猿とささゆく久館をいさる

丁厚由讚  
成美丁厚由讚

纏ふし此ひり解る鹿おとし  
浮きさる水おとしる此城  
あさあは大飯喰をさる  
清水(若此)書入をさる  
花下ぬん五尺此家をさる  
雉りさあおれ猪人此大

丁厚由讚  
成美丁厚由讚

余此



余貞

深く入りてなるをく龍溪

成義

魂棚や為する人れおのり多

寸来

世非や垣下りとしるるは猶

表下

分る月人ぬあはするや野望入

其由

みり月やおちる老雀れあふれ口

一成

川上れ月の指や辰木はたて

義山

いさむれ園をいせうく小ありな

稜

昔もれ香や吹る程をつる捲きし

鼓子

山をたもつてはるを鏡や林海崇

梵山

物もあはし山をたもつてはるを鏡や林海崇

宗讚







是部を... 樂天... 膝... 杜... 執... 行... 指...

由水





